

Bürgertum und Städtewesen im deutschen

Mittelalter ..... Brunner

Deutsche Heldendichtung ..... Kralk

Das deutsche Recht ..... Hugelmann

Der deutsche Staat des Mittelalters..... Dopsch

Bildung und Schulwesen im Mittelalter ..... Smunz

Mittelalter und Neuzeit..... Srbik

右分擔表に於いて注目せられることは、史學の専門家は全執筆者の約四分の一を占むるに過ぎず、他は悉く文學、美術、哲學、法學等の専門家であることで、殊に宗教及び教會の問題が一も觸れられてゐないことは、從來の中世研究と對比して最も奇異の感を起さしめる。恐らく本書の編述方針は全體的に、中世文化の俗的方面に向けられて居ると見るべきであらう。本書の中に於いてヒルシュ教授も述べて居る如く、中世研究は、永き停滯期の後再び現代人の活潑なる關心の下に立ちつゝある。それは、古代史研究に於ける如き、史料方面よりの新刺激に負ふものではなくして、新しい世界觀の動きに由來する

ものであらう。中世に對する新なる理解が求められつゝある、而も大家の時代でない今日、一人の手によつて完全なる、眞に満足すべき中世史の書かれることは、何時のことであるか吾人は是を期待し得ないのである。されば本書の如き、種々の専門學者の協力的出版が、中世の種々なる斷面を理解せしむるものとして、極めて時宜に適した興味ある試みとして歓迎せられるのである〔鈴木〕

### ● 朝鮮小史 小田 省吾著

本書は朝鮮に在つて多年文教の中樞に參與せられ、今は京城大學に於て朝鮮史講座の一を擔任される著者が、一般世人に朝鮮史の概念を會得せしめん爲に概説されたものである。従つて研究的敘述ではなくて専ら平易な行文により何人にも分り易く述べる事を主眼として著されたのであるから、特殊な部門に關して研究せんとする人士にとつては緊要な書とは云ひ得ぬかも知れないが、一通り古代朝鮮より現時迄に至る半島内の變遷、朝鮮の地理的情勢より有つ所の日、支との關係に對する概念を得

るには、眞に便利な書物と云ふべきである。本書の叙述は上世(三韓三國より新羅の衰亡迄)、中世(高麗時代)、

地圖八葉、昭和六年十月財團法人魯庵記念財團發行、京城大阪屋號書店發賣。定價貳圓參拾錢)

近世(李氏朝鮮時代中大院君出現の前迄)、及び最近世(大院君以後現今に至る迄)の四時代に大別し、二十章に小

●雜攷第一・二・三・四輯 鮎貝房之進著

分して各時代著しい事件を中心に論述されて居り、殊に近世及び最近世即ち李氏朝鮮時代の爲に全紙數の半が割かれて居る所は著者の意が那邊に在るかを窺ふに足るものと考へられる。又附録として載せられた精巧な寫眞版二十六葉、歴代表、王室世系表、年代表及び疆域圖は藤田亮策、中村榮孝二氏の努力による所大と聞くが、これ亦本文同様或點にては以上に學徒を利する所大なるもの有り、朝鮮文化の一斑、朝鮮史の大勢を知るには甚だ便利なものであつて、本書の價值は此の附録有るによつて一層高められるものと思ふ。今茲に朝鮮史研究入門の一として此の良著を著はされた著者と、その成書に多大の援助を與へられた藤田中村二氏の勞を謝し、又本書の出版を援助された魯庵記念財團の舉を多とする次第である。(菊版本文百五頁、圖版二十六葉、附録三十五頁、

近來朝鮮に關する研究愈進み、諸種の著述の上梓されるのは學界の爲甚だ慶賀に堪へない次第であるが、茲に又鮎貝氏の勞著を獲るに至つて吾人は更に其喜を限りなく深くするのである。本書は多年朝鮮統治の上に盡瘁されたる著者が、官を退いてより靜かに思念を研究に専らにせられて出來たものと聞いて居る。題して雜攷といふは著者の個々の研究の纏るまゝに上梓される假の名稱であり、やがては朝鮮言語學研究上の總括的題名を附せられる遠大なる計劃理想に本くものであると思はれる。吾人は著者の筆視愈盛んにしてよく其の研究を集大成され朝鮮史又朝鮮文化史研究の上に絶大の貢獻を致されん事を祈つて止まぬ次第である。今日迄既刊の四輯に對して茲に詳しく紹介する餘裕を有せぬのは著者に對して甚だ禮を失すると思ふが、左に其の内容目次を記して紹介

にかへる事とし著者の寛恕を仰ぎ度次第である。

雜攷第一輯は「新羅王位號並に追封王號に就きて」の論說五項を收録してある。即ち一、居世干、居西干、居瑟干。二、次々雄、慈充。三、尼師今、尼叱今、寐錦。三麻立干。四、葛文王の五項である。何れも古朝鮮史上諸家の間に問題となり論議された王號名稱であつて、著者はこれ等に精緻な朝鮮言語學的考證と穩健な斷案とを以て從來の諸說の上に一步進んだ研究をなされたものであつて、古朝鮮史研究家の是非一讀さるべきものと思惟するのである。

雜攷第二輯(上・下)は「日本の韓・新羅、任那、百濟、高麗、漢、秦等の古訓に就きて」の考說を九項に分つて述べられたものである。主として記・紀以下の日本古文獻より撰び出された語によつて、朝鮮の文獻を併せ考へてなされた研究であつて、一、韓(カラ)、二、新羅(シラキ)三、任那(ミマナ)、四、百濟(クタラ)、五、高麗(コマ)、六、漢(アヤ、アナ)、七、吳(クレ)、八、秦(ハタ)、太秦(ウツマサ)附己智、物集。九、勝、使主、村主、評の九項が

その内容目次である。

雜攷第三輯は「俗字攷」で俗字、俗訓字、俗音字の三項に關して述べられた半紙版百七十二枚の長篇である。俗字は漢字に倣つて造られた朝鮮の字であり、俗訓字は漢字義を譌り訓じたもの、或は漢字義より一轉して他の義に用ゐられたものであり、俗音字は字典に掲げある正俗の俗でなく、字典に掲げてない通俗音字を云ふのである。第一種は二十五劃百五十餘字、第二種は三十六字、第三種は二十三字の多數の字に就いて夫々精密な言語學的研究をなされたものに外ならないのである。

以上の三輯は主として言語文字に關する研究であるのに反して次の

雜攷第四輯は「花郎攷」で、新羅花郎の傳記、溯始、名稱、組織、繼續期間、郎徒との關係、擲置の目的、花郎氣質、衰退の原因及び歷朝に於ける花郎の變遷沿革の十項に互つて述べられた歴史的社會史的研究と稱すべきものである。蓋し花郎の制は朝鮮に於て特に新羅に於ては國運の進展の上に、又延いては社會風俗の上に實に重大

關係有る、特殊な意義を有つ制度である事は周知の事であつて、古くより注意された所であるが、纏つた研究としては余り多く出るものなかつた時、此に本書を得た事は實に得難き收獲と云はねばならないのである。恐らく仔細にみる時、著者の考説の片々には直に首肯しかねる所も有るであらうが、この書によつて斯界學徒の裨益せ

られる所大なるを覺え、此に謹んで著者の勞に滿腔の感謝を捧げる次第である。(京城、合名會社近澤出版部發行半紙版和綴本。第一輯六十四枚、定價壹圓八拾錢。第二輯上九十枚、定價貳圓、下六十九枚、定價壹圓五拾錢。第三輯百七十二枚、定價六圓五拾錢。第四輯八十九枚、定價貳圓)

●毛文龍と朝鮮との關係について

田川 孝三著

本書は京城帝大教授今西博士の青邱說叢卷三として刊行されたものであつて、著者田川氏は昨年三月京城大學を卒業された新進の朝鮮史研究家である。氏が其の卒業

に際して提出された卒業論文は京城大學に於て最も優秀なものと聞いて居たのであるが、それが今や氏の恩師であると共に亦吾人の恩師の一人である今西博士の援助により、一書となりて世に出で、吾人亦今西博士並に著者の厚意により一部を座右に備ふるに至つた事は實に絶大の歡喜とする所である。

蓋し明末に於る清朝の出現は東洋近世史上に於て非常な意義あるものなる事は云ふ迄もない事であるが、殊に其の勃興當初に於る史的關係の獨り明に對してのみならず、朝鮮にも倚與する所大にして、明清鮮の三國相關の華々しい時代が存した事は、吾人滿洲學徒にとりて特殊の興味を呼び起すのである。而してこの明末清初の史的研究には明清兩朝の史料の外に朝鮮の史料が不可缺のものであり、嘗に兩國史料の不足を補ふのみならず、幾多問題解決の關鍵を握れる事は吾人の信じて疑はぬ所であるに、今や右の説問を實示して田川氏が貴重なる朝鮮の史料を涉獵讀破し、又明清の史料を採收して、僅々一年の勞作として此名論文を物された事は實に敬服の至りで

あり、衷心その勞を謝する次第である。

さて氏の論文は六章十四節に分たれ、第一章は序論の意味に於いて光海朝に於る朝鮮と明清との關係を論じて、特に光海君の密旨事件に鋭き解剖のメスを下し、第二章には毛文龍の朝鮮出來と光海君との關係、第三章には毛文龍の東江開鎮と清朝に對する牽制、第四章には仁祖朝に於る毛文龍との關係、第五章には丁卯の亂と毛文龍との關係、第六章には毛文龍の死と其後の形勢とを論じてある。蓋し李朝宣祖より光海君、仁祖に至る三代の間は著者の序に説かれた如く、李朝五百年間に於て未層有の外難に遭ひ、蟬脫克服に非常な困苦を嘗めた時であつた。殊に光海君、仁祖二代の對明對清の問題は朝鮮民族の對外關係史上重大な意味有ると共に勃興途上の清朝にとつても亦重大な意味有る時であつた。新興の意氣に燃ゆる清朝の前に老衰の明の運命は累卵の危さであつたが、この際明を宗主國とする朝鮮は現實の國家生存權確立の立場よりして如何なる態度をとるが適當であつたか、それは明清二國の勢力が自ら決定する問題であつた。此に於

て朝鮮が二國の間に介在して長も微妙な立場に置かれる事になつたのは自然の成行であつて、遂に傳統を棄てて彼は現實の勢力に屈服するの餘儀なきに至つた。これ光海君が滿廷の反對を抑切つて親清の態度に出た所以であり、やがてこれが朝鮮を救ふに至つた次第である。然しながら此時毛文龍なる怪傑が突如現はれて三國間の關係を錯雜にし、朝鮮の二國間に於る位地を益々困難ならしめ、やがては光海君の意圖に反して朝鮮にとりて忌むべき結果を促進するの結果を招來し、又明に對しては其の對清策を困亂に陥し入れるに至つたのである。實に毛文龍の出現は一時三國間の關係史上に於て正に關鍵的なものであり、殊に朝鮮の立場を見極める上に於て看過し得ない立役者となつたのであつた。従つて毛文龍の研究は此の錯雜した三國の關係を解釋する鍵であり、朝鮮の位地を見定むべき重要なエレメントであつたのである。これ田川氏の本研究ある所以であり、而して氏の力作はよく明快にこれが解決を下されたのである。而して恐らく氏は今後とも滿鮮史の研究に鵬翼を伸ばされる事と期

待するのであるが、更に明實錄、或は「毛大將軍海上情形」等によつて増補されて、この研究をして一層完璧なものとなされ、以て將來の大成を企圖されん事を祈るのは獨り吾人の希望のみでなく、學界の均しく待望する所と確信するのである。此に重ねて氏の勞を謝し、又これが指導に當られ且出版の勞をとられた今西博士の厚意を謝して、本篇紹介の結びとする次第である。(菊版百六十一頁、京城大學今西博士刊行。京城、合名會社近澤印刷部印刷、限定賣價壹圓)(以上鴛淵)

● *Staatssozialistische Versuche im alten und mittelalterlichen China.*

O. Franke.

*The Economic History of China* なる大けさな書名を附してゐる Mabel Ping-hua Lee (New York 1921) の著書は、個々の事實の無批判的總括で餘り多くの誤謬と誤解を有つてゐて經濟史とは稱し難い。龐大内容豊富且整然たる、然し全く片面的に獨斷的マルクス主

義的に羈束せられてゐる K. A. Wittfogel の著 *Wirtschaft und Gesellschaft Chinas* は發行中である

と著者が冒頭に言つてゐるに徴しても此論文が如何なる抱負と企圖と自信の下に爲されたかを知り得るのである即ち此は唯に王莽王安石に依る二大經濟變革を中心にして支那上中代に於ける主なる經濟政策即魏李悝の盡地力、前漢武帝の採りたる均輸平準及鹽鐵酒の專賣制度並に其に對する鹽鐵論の批難、唐劉晏の常平鹽等の個々の制度、運用の實狀を詳説したるに止らず更に深く諸經濟政策の間に存する歴史的關係、一貫する社會政治的思想の有無の檢討を試みてゐるものである。近來支那經濟史の研究が唯物論的に偏し史實を輕視せんとする弊ある時に當り如此確實豊富なる史料に基きて立論せられたる論文が發表せられた事は極めて有意義と言はねばならぬ。尙諸經濟政策を總括して次の如き結論が與へられてゐる。支那上、中代に於ける國家社會的經濟政策は何れも農民の困窮緩和と國庫充實に發するものであるが、李悝の法を除く外は殆總て後者なる國庫の充實を重視したもので、外